HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	訂正
Description	第60巻第3号掲載、シンポジウム「奥田民法学と信仰」の「質疑討論」の訂正
Citation	北大法学論集, 60(4), 25-26
Issue Date	2009-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40036
Type	other
File Information	HLR60-4_002.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

訂　正

シンポジウムの総括責任者からの申し出により、第六〇巻第三号のシンポジウム「奥田民法学と信仰」の「質疑討論」を、次のように訂正します。

（一）九七頁下段一〇行目からの得津晶氏の発言

（訂正後）

得津晶　商法を勉強させていただいております得津と申します。本日は大変貴重なお話をどうもありがとうございました。奥田先生が終始一貫してなさっていたのが、その断絶説、という考え方、―無因説と吉田邦彦先生はおっしゃいますけれども―、これは私も大変感銘を受けました。しかし反面ですね、ところどころ、断絶したはずの宗教の考えが学問の姿勢に入ってきているのではないかという気がするのです。例えば、宗教のおかげで色眼鏡が外れるんだ、というお話がございまして、このような形で学問に宗教が関係あるといわれてしまうと、本当に断絶しているのか、何か裏から宗教が学問の姿勢に入ってくるのではないかという気がするのですけれども。

ただ、学問において色眼鏡を外すことが大事であるというのは、宗教に関してとりたてて何も考えてこなかった私も――もちろん多くの先生方も――同じように考えてはいるのではないでしょうか。となると、これと宗教とは関係がないんじゃないかという気もします。このように、学問の姿勢と宗教とは本当に断絶なのか、何かちょっと関係があるのかというところが少し気になったのです。また、今日のお話は主にキリスト教の話が出てきたんですけれども、ところどころ、仏教だって同じだろうという話も出てきていたような気がします。このことからすると、もしかしたら私の勝手に前提にしている宗教というものが先生のおっしゃっている宗教よりも狭すぎるのかもしれません。私の中で宗教観といいますか、「何が宗教というものなのか」という範囲が狭いので、先生のおっしゃっている広い意味での宗教の裏付けのある学問に対する在り方、考え方が、私流の狭い意味での宗教からすると、宗教の裏付けなしにも成立しうるように見えるだけかもしれないのですけれども。こういうわけで、学者としてのあるべき姿というか、先生のおっしゃっ

ている色眼鏡をはずすという中立のようなものが――そもそも、中立というのが本当にあるかどうかはちょっとよく分からないんですけれども――本当に宗教から断絶しているのか、それとも何か別なものから来ているのかがわからないのです。ちょっと漠然としたご質問で申し訳ないのですが、よろしくお願いします。

（二）九九頁上段八行目からの得津晶氏の発言

（訂正後）

得津　なるほど、次元が違うという意味での断絶説ですので、異なる次元への切り込みというものがあるわけですから、無因説とはちょっと違うのですね。もう一つの質問は、宗教の裏付けなしにも、学問の中立性といったようなことは同じように言えるのではないかという質問でした。が、すでにいただいたご回答から、ご講演の内容を踏まえますと、そのような根っこがないにもかかわらず、「学問は中立であるべき」とかやたら学問の姿勢についてとやかく言うのは、偽善につながるということでしょうか。私にも、身に覚えがないわけではありませんが…何かまだ雲をつかむような話で、完全には理解していないのですけど、どうもありがとうございました。